

# 良忠撰『浄土宗要肝心集』上巻と『浄土宗要集』第二巻について

南 宏 信

## 〔抄 録〕

浄土宗鎮西派第三祖然阿良忠（一一九九～一二八七）の著作には、浄土宗義に関わる問題点を二十四論題あげて解釈を施した『浄土宗要集』五巻がある。該本には先行する『浄土宗要肝心集』三巻があり、これに構成の改編・増広を施したのが『浄土宗要集』五巻である。本稿では、従来から知られている両書の写本・刊本に加え、一つには如導（一二八四～一三五七）写の東向観音寺蔵

本と二つには浄空（不詳）写の真福寺蔵本を扱い諸本の変遷を考察する。

キーワード 良忠、如導、『浄土宗要肝心集』、『浄土宗要集』、東

向観音寺

## はじめに

浄土宗鎮西派第三祖然阿良忠（一一九九～一二八七）の著作には、浄土宗義に関わる問題点を二十四論題あげて解釈を施した『浄土宗要集』五巻がある。該本には先行する『浄土宗要肝心集』三巻があり、これに構成の改編、設問の数増広を施したのが『浄土宗要集』五巻である。良忠をテーマにした論考は数多く、この二書を繞る問題も既に先考研究がある。<sup>〔1〕</sup>

本稿で比較した両書の写本・刊本は以下の通り。<sup>〔3〕</sup>

### 『浄土宗要肝心集』の諸本

- （1）金沢文庫蔵写本（弘安十年十月写、一二八七年）。
- （2）東向観音寺蔵本（正和三年頃書写、一三二四年）。既に別稿で論じた通り、該本の書名・構成は『浄土宗要集』であるが、内容は部分的に『浄土宗要集』の文を含む『浄土宗要肝心集』である。よって今便宜上『浄土宗要肝心集』諸本の中に列挙した。

詳細は後述する。

- (3) 松井達音氏寄贈本(佛教大学蔵)。写本。三巻三冊。四つ目綴じ。奥書等はないが、江戸時代の奥書を持つ(4)(5)と同様であるので、江戸時代の書写と思われる。

- (4) 天性寺文庫本(佛教大学蔵)。写本。上巻の一冊のみ現存。表紙は左下が破損している。五つ目綴じ。奥書「于時享保十六年亥九月廿五日寫之畢／頼岡書」とあるように享保十六年(一七三三)の書写である。

- (5) 大正大学蔵本。写本。三巻一冊。四つ目綴じ。慶応四年(一八六八)奥書(朱筆)を有する。廣川氏がいうように、本文とこの朱筆と同一人物であるかどうかの問題は残るが、少なくとも慶応四年が下限であろう。

この他に紀氏諦念氏贈本(佛教大学蔵)を『続浄土宗学関係書籍目録稿』によって確認できるが、現在欠本とのこと。

# 『浄土宗要集』の諸本

- (1) 真福寺蔵本。写本。奥書「永和二年八月日於洛中圓福寺書寫之畢 淨空(花押)」。(二三七六)の奥書を持つ本書は、管見では現存最古にして唯一の写本である。先取りして言えば、本書は他の『浄土宗要集』版本と比べて、文章に若干の出入りがある。五巻中第二巻のみの現存ではあるが貴重な資料である。

- (2) 寛永十二年版(一六三五年、佛教大学蔵極楽寺文庫本)。五巻五冊。四つ目綴じ。附訓。

- (3) 慶安四年版(二六五一年、佛教大学蔵)。紀氏諦念寄贈本。五巻五冊。五つ目綴じ。刊記「慶安四<sup>卯</sup>曆仲秋吉辰／寺町通圓福寺町／秋田屋平左衛門刊行」

- (4) 文政二年版(二八一九年)。佛教大学が蔵する数セットの一つに「現流布之旧本慶安四<sup>卯</sup>調割至文政二<sup>己</sup>卯凡歷百六十年／旧本<sup>標目</sup>出<sup>卷別</sup>始<sup>今全部</sup>標目總而首卷之始<sup>拳</sup>之」とあるように、目次を第一巻の始めに集約している。了道が拝写した良忠と白旗上人の挿絵と、増上寺大僧正騰誉実海の序文がある。

## 『浄土宗要肝心集』諸本比較

以上、管見によると『浄土宗要肝心集』は写本のみが伝わっている。今回対照するのは『浄土宗要肝心集』上巻と『浄土宗要集』第二巻である。それは両書が対応関係にあり、かつ東向観音寺本と真福寺本が共に第二巻のみの現存だからである。よってその変遷を見る上で貴重な写本であり、比較対照する際に看過できるものではない。比較すると基本的には同じ構成ではあるが、詳細に見ると少なからず相違が確認できる。以下三系統に分け、特徴を挙げる。一には「金沢文庫本」(弘安十年十月写、一二八七年)、二には「東向観音寺本」(正和三年頃書写、一三二四年)、三には「他三本」である。この「他三本」は享保十六年(一七三二)、慶応四年(一八六八)の書写である。もう一本は奥書等は確認できないが、書写時期は他二本と遠くは離れないと思われる。この「他三本」は前二系統と比較した時の異同箇所が一致することから一纏めに扱った。

(1)「金沢文庫本・東向観音寺本」と「他三本」に分かれる場合

●金沢文庫本（東向観音寺本、仮六十四丁裏二行）。

①第三會似佛願力并託佛願等之釋者如上已弁難云今家釋中雖有念佛願佛願之表詮今無餘行非本願之遮詮雖有表詮無遮詮事者揺學者之習也如彼云雖無經疏亦無遮故若無遮詮諸行非本願義難成立如何。

②答既有表詮必有遮詮遮表是常相對故大師所釋中其證甚多所謂一者經云相於西方。釋云直指西方簡餘九域二者經云念佛衆生攝取不捨。釋云不爲餘緣先不照觀念法門云惣不論照攝餘雜業者三者：（仮二十一丁裏四行）。便宜上、改行や句読点を附した。以下同様。）

●他三本（松井達音氏寄贈本を引用）

①第三會似佛願力并託佛願等文者義相如上已辨疑者云釋中雖有念佛願佛之表詮無餘行非本願之遮詮也。雖有表詮無遮事揺學者習也。如云雖無經說亦無遮故若無遮詮諸行非本願義難成立如何。

②答既有表詮可有遮詮遮表是勝劣相對故。大師所釋中其證惟多。所謂一者經云想於西方。釋云直指西方簡餘九域。二者經云念衆生攝取不捨。釋云不爲餘緣先普照要集云不言彌陀光明照要行者。三者：（四十五丁表五行）。

ここでは二種の系統に分かれる。まず金沢文庫本と東向観音寺本で

は「難云」とあるのを他三本では「疑者云」としている。この文体の微妙な相違は良忠の時代に近い方が批難の傾向が強いという事を示す。大きな違いとして金沢文庫本と東向観音寺本では『觀念法門』を引用する箇所を他三本では『往生要集』を引用する。

(2)「金沢文庫本」と「他三本」と「東向観音寺本」に分かれる場合

（『浄土宗要肝心集』から『浄土宗要集』への変遷の様子が垣間見られる）

(例一)

●金沢文庫本

- ①難云、果遂言誰知約善根深厚者願順次果遂有。
- ②千手經云。誦持大悲神咒者現在生中一切所求。若不果遂者不得名爲大悲心陀羅尼也文。又云若衆生現世求願者於三七日淨持齋戒誦此陀羅尼必果所願文。
- ③〔なし〕又依何文此願慥遠生見耶（仮十一丁裏四行）。

●他三本

- ①難云、果遂言誰知約善根深厚者願順次果遂有。
- ②千手經云。〔なし〕云云。
- ③〔なし〕又何文慥遠生見乎。（三十三丁裏六行）。

●東向観音寺本

- ①難云、果遂言誰知約善根深厚者願順次果遂有。

②千手經云。誦持大悲神咒者於現在生中一切所求。若不果遂者不得名爲大悲心陀羅尼也。又云若諸衆生現世求願者於三七日淨持齋戒誦此陀羅尼必果所願文。

③順現尚爾。況順次乎。又何文。慥見遠生耶。(仮四十七丁表六行。)

ここで金沢文庫本と東向觀音寺本は、②の箇所で『千手經』を引用するが、他三本では「云云」として省略する。又③の箇所では三者とも微妙に文章に相違がある。東向觀音寺の「順現尚爾。況順次乎」は他本には見られない箇所である。そして東向觀音寺本の「又何文。慥見遠生耶」は、金沢文庫本・他三本では「遠生見」とあるように、東向觀音寺本の方が文体は整っている。このことから東向觀音寺本は他本と比べて編集の跡が垣間見られる。

## (例二)

### ●金沢文庫蔵本

①難云、義寂十九願名攝取修德欲生願。法位云攝中三品。憬興同之。豈非云諸行本願耶。又第二十智光名聞名繫念修福即生願。慈惠名聞名繫念修善定生願。修福修善亦豈非諸行哉。云何。  
②答、如九品義。有雖雖名。修善定生願。至細判之時。屬順後業。是得名之不委也。准之餘師亦雖名修德修福。未必存諸行本願之義歟。

③〔なし〕

### ●他三本

④〔なし〕  
⑤〔なし〕(仮十六丁裏一行。)

①難云、義寂十九願名攝取修德欲生願。法位云攝中三品。憬興同之。豈非云諸行本願乎。又第二十智光名聞名繫念修福即生願。慈惠名聞名繫念修善定生願。修福修善亦豈非諸行乎。如何。

②答、如九品義。者雖名修善定生願。至細判之時。屬順後業。是得名之不委也。准之餘師亦雖名修德修福。未必存諸行本願義歟。

③次出先達料簡者上人入大經釋云念佛往生願不嫌男女來迎引接誓即亘男女。繫念定生願文然也。

④〔なし〕

⑤雜問答云。或人云十八願稱名、二十願諸行願云。此義如何。蓮華谷答云、其条不被得心。生因願即可一歟。於同行者生因來迎果遂立可亘歟云云。妙香院淺近念佛鈔云、問、先起十念往生誓、念佛利益既顯。重立係念定生願、教主本懷何要。答、第十八願至心信樂之輩、顯順次往生更無疑之事。第二十願繫念我國之輩、欲生果遂終不及之旨歟。重問云係念我國分裔如何。又其類往生何。答、分裔難知。又其生難知但准華嚴圓宗三生成道例、普賢行者三生即得見不可過三生歟。學義也。人意歟。(四十一丁表一行。)

# ●東向觀音寺本

①難云、義寂十九願名攝取修德欲生願。法位云、攝中三品。憬興同之。豈非云諸行本願耶。又第廿智光名聞名繫念修福即生願、慈惠名聞名繫念修善定生願。修福修善亦豈非諸行哉。云何。

②答、如九品義者雖名修善定生願、至細判之時屬順後業。是得名之不委也。准之餘師亦雖名修德修福、未必存諸行本願之義歟。

③次出先料簡者上人大經釋云念佛往生願不嫌男女來迎引接誓即亘男女。繫念定生願又然也文。

④湛空上人云。先師上人、第廿願意仰云。人師此願釋、或係念定生願云。或三生果遂願云源空之存念三生果遂之釋、但叶。其故彌陀本願值念佛行百年之内決定可生極樂也。然者曠劫之間今百年之内可見淨土也。一生二生雖不往生、第三生決定可遂。然者自今以後一生五六年不可過。又又生之間決定、可入淨土之故也、蒙仰。以之值本願悦也云々。先師慥仰也。建長三年後九月廿七日、記之湛空在判親寫  
彼自筆記

⑤雜問答云。問、或人云十八願稱名願、廿願諸行願云。此義如何。蓮華谷答云、其条又不被心得。生因願即可一歟。於同行者生因來迎果遂立可亘歟云々妙香院淺近念佛鈔云、問、先起十念往生誓、念佛利益既顯。重立係念定生願、教主本懷何要。答、第十八願至心信樂之輩、顯順次往生更無疑之事。第廿願係念我國之衆申下欲生果遂終不空之旨歟。重問係念我國分裔如何。又其類往生何生哉。答、分裔難知。又其生難知、但准華嚴圓宗三生成

道例ニルニ普賢行者三生即得不可過三生學者一義也用  
否可人意歟（仮五十八丁一行。）

これを見ると金沢文庫本、他三本、東向觀音寺本の順に文章の増広が確認できる。④の箇所は『浄土宗要集』のみに見られる文章である。東向觀音寺本が『浄土宗要肝心集』の構成を有しながら『浄土宗要集』の書名を有することを勘案すると、(例一)と併せて興味深い増広箇所である。

(3)「金沢文庫・他三本」と「東向觀音寺本」に分かれる場合

## ●金沢文庫本

- ①「欠損」臨命終時無量壽佛與比丘衆前後圍繞現其人前文
- ②答、十九二十兩願成就合說之歟
- ③又單殖字單德本言自有順次義歟。若殖德本兩言說並者決定可多生ナル（仮十三丁表一行。）

## ●他三本

- ①難云殖字約多生者何故實積說十九願成就云發菩提心專念無量壽佛及恒種殖衆多善根至臨命終時無量壽佛與比丘衆前後圍繞現其人前上已
- ②答、十九二十兩願成就合說之歟
- ③又學殖字單德本言自在順次義歟。若殖德兩言并者決定可多生ナル（三十七丁表一行。）



### ●東向観音寺本

①難云言殖字約<sup>スト</sup>多生<sup>ニ</sup>者何故寶積經說十九願成就云發菩提心專念無量壽佛及恒種殖衆多善根<sup>至乃</sup>臨命終時無量壽佛與比丘衆前後圍繞現其人前文

②答、十九二十兩願成就合說之歟

③「なし」(仮五十二丁表六行)。

この場合は東向観音寺本のみ③を欠く。纏まり有る一文が欠けていることから書写時の脱落という可能性は低い。だとすると、そもそもこの一文は無かったのか、それとも意図的に削除したかのどちらかである。金沢文庫本が良忠没年に書写され、他三本もその文を有していることと、これまでの比較において東向観音寺本が他二系統よりも若干の手が加えられていることを勘案すると、東向観音寺本の系統は何かの意図によって、削除した可能性を指摘できる。東向観音寺本が、基本的には『浄土宗要肝心集』の内容・構成を有しながらも、「浄土宗要集巻第二」という書名を有していることや、部分的に『浄土宗要集』のみの文章を有していることも傍証となろうか。

### (4)「金沢文庫本」と「東向観音寺本・他三本」に分かれる場合

この場合は「如何」の有無である。金沢文庫本のみ「如何」が無い(仮二十二丁裏五行)。これまでに見たように、金沢文庫本を軸に東向観音寺本と他三本に分かれる。この傾向に依ると(4)の様に分かれるのは不自然である。東向観音寺本と他三本とは系統が違う。金沢文

庫本の系統に本来無かった「如何」を、後にそれぞれが挿入したのであろうか。或いは金沢文庫本が書写時に意図的な削除を施したのであろうか。「如何」はこれまで見てきた相違に対して意図的に削除や増広をするような文言でもないので書写時の脱落であろうと思われる。

### (5)「他三本」中での相違

これらは「揺」か「ユルガス」かの相違である。これらの箇所該当する金沢文庫本と東向観音寺本はいずれも「揺<sup>ユルカス</sup>」と表記しているので、本来「揺」だったものが書写の時点で「ユルガス」と書写された可能性が指摘できる。

### 小結

これらを見るに(1)の比較で、大別すると、「金沢文庫本・東向観音寺本」と「他三本」になる。しかしこれは傾向を示したのみで、必ずしも明確なものではないことは他の比較で明らかである。東向観音寺本は他二系統比にはない『浄土宗要集』の文言を有していることから、『浄土宗要肝心集』の複雑な変遷を見ることがになる。

### 『浄土宗要集』諸本比較

『浄土宗要集』は真福寺本(一三七六年)以外、全て同系統の江戸期の版本になる。真福寺本は第二巻のみの現存ではあるが、東向観音寺本も同巻のみ現存するので、重要な比較資料となる。

諸本は基本的に時系列に真福寺本から寛永十二年版・慶安四年版に、

そして文政二年版へとなる。それぞれに文字の修正や、読解を容易にする為の文字を補ったりしている。その中でも真福寺本と寛永十二年版の間に相違が多い。

#### 『寛永十二年版・慶安四年版』と『文政二年版（『浄土宗全書』所収）』

版本で確認できるのは冒頭にも挙げた通り三本である。この内寛永十二年版と慶安四年版は同版である。「寛永版・慶安版」と「文政版」を比較すると、基本的には同一版であるが、冒頭で述べた意外の相違点以外に、「寛永版・慶安版」から「文政版」へと、若干の異同が確認できる。

#### 『浄土宗要肝心集』と『浄土宗要集』の比較

##### 『浄土宗要肝心集』諸本と「真福寺本」と「版本系統」の相違

版本系統は真福寺本よりも文字を補っており読解し易くしている。版本系統同士の異同よりも多くの箇所を確認できる。それとは違い、次の「六由釈」の比較は単なる読解の便を図るといった相違ではない。また六由釈の構成においては以下のような相違がある。

#### ●東向観音寺本

次第二十繫念定生是宿善果遂即順後業願也。而舉衆善者爲顯果遂者善本。故殖諸德本者出果遂所由也。不可名諸行本願。此有六由。①一異譯兩經說並三生顯順後往生。故②二御廟順後業釋爲證。故③三觀念法門引文除殖諸德本一句。故④四殖諸德本言約多生。

故⑤五不果遂者言顯順後業。故⑥六不可捨結緣人。故。（仮四十三丁裏四行。）

#### ●真福寺本

次第二十繫念。是遠生果遂願也。爲顯三所果果遂機之本善云。殖諸德本。此果遂由非所暫行。此有五由。①一異譯兩經並說。三生。故。②二御廟順後業釋爲助證。故。③「なし」④三殖德本言約多生。故。⑤四不果遂者言顯順後生。故。⑥五不可捨結緣人。故。（二十九丁表六行。）

#### ●文政二年版

次第二十繫念定生。是遠生果遂願也。爲顯三果遂機之本善云。殖諸德本。此果遂之由非所暫行。此有六由。以示義意。①一異譯兩經並說。三生。故。②二御廟順後業之釋爲助證。故。③三殖德本言約多生。故。④四不果遂者言顯順後生。故。⑤五觀念法門除殖諸德本之一句。故。⑥六不可捨結緣人。故。（『浄土宗全書』一一卷四五頁上段一六行。）

ここでは『浄土宗要肝心集』と『浄土宗要集』の間に六由の名目の順序・数に変化がある。真福寺本では「觀念法門除殖諸德本之一句。故」を省き、五由とする。この文の後に一から順次説明しているが、真福寺本が省いた「觀念法門除殖諸德本之一句。故」を、版本系統では、第四由の説示中に第五由として組み込んでいる。それによって五

由から再び六由に戻している。以下の通りである。

### ●真福寺本

①四果遂言顯順後往生玉篇云果〔中略〕千手經者文前後殖果累生。故云无宿善者尚不聞名。況誦念耶。故彼經文還證今義云

②〔なし〕

③〔なし〕

④難云。若爾者、念佛往生亦由宿善値此法。彼既順次。此豈不爾乎。

⑤答。苦道難轉故現在成願者、必由深厚之宿善。我今疾苦皆由過去之說。可思之。業道易轉故順次往生者只論値教之宿因。(二十三丁裏九行)

### ●文政二年版

①四果遂言顯順後往生者玉篇云果〔中略〕千手經者文前後殖果累生。故云无宿善者尚不聞名。況誦念耶。故彼經文還證今義云云。

②五達觀念門者、若言、第二十願誓願諸行者何除植諸德本一句。若言唯舉兩三昧益故者、何引三十九願云修諸功德。亦引觀經云下修定散二行人等耶。若言爲取念佛引諸功德及定散人第二十願偏諸行故除此句者所引何詮。若言聞名是念佛者何名諸行願耶。

③疑者云。十八十九順次攝生故二十願亦同順次也。今云。約過現門、同上二願順次攝生。故異宿値。但舉現生至心廻向。聞名係念通過現故兼置現生熟時中云云。

④難云。若爾者、念佛往生亦由宿善値此法。彼既順次。此豈不爾乎。

⑤答。苦道難轉故現在成願者、必由深厚之宿因。我今疾苦皆由過去之說。可思之。業道易轉故順次往生者只論値教宿善。(『浄土宗全書』一一卷四八頁上段一行)

現在の所、真福寺本は『浄土宗要集』の構成を有する伝本の嚆矢であり、唯一の写本でもあることから資料的な価値は高い。そしてこの名目の数・順序の変化は『浄土宗要集』に先行する『浄土宗要肝心集』諸本には見られない構成である。更に『浄土宗要集』の版本系統は真福寺本の変更内容を前提として編集していることが予測できる。『浄土宗要肝心集』から『浄土宗要集』の変遷を見る上で、今後更なる検討が必要である。

### 廣川氏の所説

これまでの比較を基にして先行研究を検討する。廣川氏は『浄土宗要集』とその前身である『浄土宗要肝心集』の關係について以下のよう整理している。

①『宗要集』における他の良忠撰述書の引用例として一五四例検出することが出来た。さらに今後も検索を続行するつもりであ



る。

②『浄土宗要肝心集』は『宗要集』の草稿本である。

③『宗要集』の成立は弘安五年（一二八二）十二月中旬以降と推定できる。

④『宗要集』は単に『伝通記』、『決疑鈔』等から抜粋・編集されたものではなく、それを土台としつつも、新たに執筆された著述である、といえる。<sup>(4)</sup>

### 草稿本としての『浄土宗要肝心集』

①については今、話題とはならない。②の理由としては以下の五種を挙げている。

(一)『肝心集』はその表現がより素朴である。『宗要集』の文章にくらべていまだ十分に練りあげられてはいない。

(二)『肝心集』はカタカナ交じりの和文・漢文混合体であるのに対し、その後に『宗要集』ではカタカナを漢字に直し、いまだ漢文体になっていない部分はすべて漢文体に整えている。

(三)『宗要集』には『肝心集』には全くなかった文章がしばしば新しく加筆増補されている。とくに大幅な増補の例として第八、十、十一、十六論題に九箇所指摘することができる。

(四)『宗要集』の文章はより簡潔で、よく練られている。

(五)『宗要集』には、例えば、第九論題の第二十願釈の六由釈のように、『肝心集』の文章の順序の改編が見られる。

<sup>(5)</sup>とし、良忠が『浄土宗要肝心集』から『浄土宗要集』に改編したと結論づける。(一)と(四)は同様のことを述べている。これまでの諸本比較を見る限り、『浄土宗要集』の中でも段階的に文章が変化していく。また、真福寺本から版本の間では寛永版の文章が読み易く編集されている。何を以て文章が練られたか判断するかは、更なる具体的な比較検討が必要になる。

(二)について。金沢文庫蔵『浄土宗要肝心集』の残存箇所を見る限り全て漢文体である。また第二巻のみに限ってだが、「揺<sup>ユルカス</sup>」と「ユルガス」は江戸時代の諸写本においても表記が区々である。一字分のスペースに「ユルカス」と表記する箇所もある。よって(二)の主張は『浄土宗要肝心集』から『浄土宗要集』へと改編されたことを証明する根拠とはなり得ない。金沢文庫本が良忠没後三ヶ月後の書写を示す奥書を有するので、本来漢文体であったものが、後に仮名文字交じりで流布したという可能性も充分考えられよう。

『浄土宗要集』にしても一部仮名交じりの箇所が確認できる。<sup>(6)</sup>

(四)の「より簡潔で、よく練られている」については、仮名交じりの箇所をすべて漢文体にすることを以て「簡潔」や「よく練られた」とすることはできないし、文体が読み易く整理されるのは寛永版からであり、真福寺本は寛永版に比べて素朴な文であるといえる。

(三)と(五)は東向観音寺蔵本も含めて『浄土宗要肝心集』から『浄土宗要集』へと段階的に改編していく過程を見る上で重要な関心事項である。

### 『浄土宗要集』の成立時期

③の成立問題について。廣川氏が『浄土宗要集』の成立を弘安五年（一二八二）としているのは、良忠撰『安樂集私記』がその書写奥書を有しており、その『安樂集私記』を『浄土宗要集』が引用しているからである。

『浄土宗要肝心集』との関連でいうなら、『浄土宗要肝心集』も『安樂集私記』を引用するので弘安五年以降にまず『浄土宗要肝心集』が成立し、後に『浄土宗要集』が成立したことになる。では『浄土宗要集』はいつ頃成立したのであろうか。良忠は弘安十年（一二八七）に没しているが、『安樂集私記』成立以降、入滅までの五年間の間に『浄土宗要肝心集』を著し、更に大幅な増加と構成の改編を施した『浄土宗要集』を成立させるということは果たして可能であらうか。金沢文庫本は良忠没年に『浄土宗要肝心集』を書写しているが、『浄土宗要集』が既に完成しているはずであるのなら『浄土宗要集』の方を書写する方が自然ではないであらうか。書写は鎌倉光明寺においてされているが、『浄土宗要集』の存在を知り得なかったのであろうか。それとも知りつつも眼福を得ない、もしくはそれでも『浄土宗要肝心集』を書写する理由があったのであろうか。

廣川氏は『宗要集』は単に『伝通記』、『決疑鈔』等から抜粋・編集されたものではなく、それを土台としつつも、新たに執筆された著述である<sup>⑦</sup>という。確かに構造を大幅に変え、増広されているが、『浄土宗要肝心集』と比べ何を以て「新しい著作」と位置づけている

のかは明示されていない。

『浄土宗要肝心集』の諸本中にも若干の異同があるが、弘安十年の書写本がある。また内容がほぼ一致する東向観音寺本の存在がある。一方『浄土宗要集』の写本は真福寺蔵本の永和二年（良忠没後八十九年）のみであり、それ以降確認できるのは江戸時代の寛永年代になってからである。しかも真福寺蔵本と版本とを比較すると版ごとに若干の文の増広が確認できる。

今後、成立に関しても視野に入れつつ考察を継続する。それには『浄土宗要集』の末疏『浄土宗要集聞書』（二種類）も含めた全体的な検討が必要である。

### おわりに

これまで良忠の著作をめぐる増広・改編の指摘は先学によってなされている。例を挙げれば、一つは『三心私記』である。『三心私記』には一卷本と三巻本とがあり、三巻本は江戸時代の忍漱（一六四五～一七一）によつて増広・改編されたものである<sup>⑧</sup>。今ひとつは『往生要集鈔』から『往生要集義記』への増広が挙げられる。現存諸本を見る限りでは寛永五年（一六二八）から十八年（一六四一）の間に『往生要集義記』（古活字版）の書名を有することがわかっている。

またこのような事例は良忠の著作に限ったことではなく、法然の著作等にもしばしば問題になっていることであり、解決しているものばかりではない。本稿においても容易には解決しがたい難問がつきまとった。

今回は『浄土宗要集』五卷中第二卷のみの比較であり、これを以て著作全体について論じるのは甚だ検討不足ではあるが概ね以下のようにとめられる。廣川氏の説では、『浄土宗要肝心集』と『浄土宗要集』の二分しての考察であった。しかし『浄土宗要肝心集』（金沢文庫）、東向観音寺本（題は『浄土宗要集』、内容は『浄土宗要肝心集』）、真福寺本（『浄土宗要集』、寛永版・慶安版（『浄土宗要集』）、文政版はどれも完全には一致しないことを知り得た。それによって『浄土宗要集』はその名を有する頃から増広・編集され続けて現在の形になっている。『浄土宗要集』成立の複雑さを垣間見ることができ、よって二系統のみに分けて比較するのではなく、引き続き諸本全体に渡る比較検討が必要になろう。

その中でも東向観音寺蔵本は、『浄土宗要肝心集』から『浄土宗要集』への転換期の様相を伝える伝本として重要な位置を持つ。

#### 〔注〕

- (1) 先行研究は『良忠上人研究』（一九八六年）や『源智・弁長・良忠三上人研究』（一九八七年）、梶村昇著『聖光と良忠』（浄土宗出版、二〇〇八年）等で目録が作成されている。
- (2) 廣川堯敏稿「良忠述『浄土宗要集』の成立をめぐる諸問題（一）」（『浄土学』三六、一九八五年）、同稿「良忠述『浄土宗要集』の成立をめぐる諸問題（二）」（前掲『良忠上人研究所収』一九八六年）
- (3) 『浄土宗要肝心集』と『浄土宗要集』の諸本については平成二十一年度浄土宗総合学術大会研究紀要『仏教論叢』第五十四号に「東向観音寺蔵良忠撰『浄土宗要集』について」と題して論じている。併せて参照願いたい。
- (4) 前掲廣川論文（一九八五年）。

- (5) 前掲廣川論文（一九八五年）。
- (6) 『浄土宗全書』一一卷九四頁。『和語灯録』所収「大胡太郎實秀へつかはす御返事」の三心についての言葉を引用する。
- (7) 前掲廣川論文（一九八五年）。
- (8) 『三心私記』に関する研究としては以下のものが挙げられる。金子寛哉稿「『三心私記』について」（一九八五年）、廣川堯敏稿「新出の良忠述・一卷本『三心私記』について」（『仏教文化研究』三二、一九八七年）、岸一英稿「良忠撰『三心私記』について」（『源智・弁長・良忠・三上人研究』所収。一九八七年）

#### 〔付記〕

- ・今回閲覧の機会を賜りました、東向観音寺上村貞郎住職、並びに上村法玄副住職に厚く御礼申し上げます。
- ・本稿は平成二十一年度浄土宗総合学術大会で発表した一部に加筆・修正を加えたものである。
- ・本稿は平成二十一年度科学研究費補助金（若手研究・スタートアップ）による研究成果である。

（みなみ ひろのぶ 文学研究科浄土学専攻博士後期課程満期退学）

（指導：岸 一英 教授）

二〇〇九年九月三十日受理